

ABSTRACTION 抽象絵画の覚醒と展開

セザンヌ、フォーヴィスム、キュビズムから現代へ

アーティゾン美術館(京橋) 23.06.03~08.20



19世紀末から第一次世界大戦が勃発するまでの間、フランスが平和と豊かさを享受することが出来たベル・エポックの時代、芸術を生み出す活気と自由な雰囲気になり、中、「フォーヴィスム」「キュビズム」などの新しい美術が芽吹いて花咲き、やがて表現の到達点の一つとして抽象絵画が目覚めた。その後、抽象絵画の展開は20世紀の絵画表現を牽引し潮流は同時期の日本にも及んだ。

フランティセック・クプカ 《赤い背景のエチュード》 1919年頃 上図



ポール・セザンヌ 《セント=ヴィクトワール山とシャトー・ノワール》 左
画伯はしばしばこの山を描いているが、視線をさえぎるようなモチーフは一切なく、山は力強く差し迫った現前として眼前に立ちだかっている。

アンドレ・ドラン 《女の頭部》 1905年頃 中

画伯は、フォーヴィスム(野獣派)の運動において指導的な役割を果たした画家で、風景、人物、静物など様々な画題の作品があり、作風も「シャニク」風の点描に近い技法を用いた風景画から、キュビズム風の静物画まで幅広い。

メアリー・カサット 《娘に聞かせるオーガスタ》 右

緑豊かな庭園で描かれた母子像で、画伯の作品は女性や母子などの日常生活における身近な情景を、明るい印象派的手法で描きあげる様式に特徴がある。

この頃すでに名声を確立していた画伯は、身近な家族や友人のみを描く必要がなくなり、女性や子どもをモデルとして雇うようになっていた。

